

はしがき

ムンバイ日本人会会長（丸紅インド・ムンバイ支店長）
今井 正浩

ムンバイ日本人墓地百周年を祝う記念事業として、二〇〇七年（平成十九年）度に検討開始して以来足掛け二年余、各方面多数の関係方々のご協力、ご尽力の賜物として、この度、その足跡を記した小冊子を皆様にお届けする運びとなりました。

今日、発展目覚ましい大国インドに押し寄せる人の波。我々日本人も数年前より、ようやくこの新興市場に熱い視線を注ぎ始め、ここムンバイの日本人コミュニティも年々拡大しています。しかし、今から一世紀以上もの昔、当時未だ大英帝国統治下の植民地であったこの地に商売を追い求め、あるいは、自身や日本に残された家族が生きていくための場を求め、三千人近くもの日本人が足を踏み入れ、繁栄を謳歌^{おちか}していたと言え、遠く離れた異国での厳しい生活環境の中で暮らしていました。志半ばで無念の最期を迎えた商人、人知れず静かに世を去っていた人々、未だ幼い子供たちの名も……。日本人墓地はその光と

影を脈々と刻んで、後に続く我々日本人にその歴史を伝えてきました。

年に一度の墓参会はその先人たちの心を知る機会であり、当時に思いを馳せながら、今日、我々日本人がここで安心して暮らす礎をなしてくれた彼らに安眠の祈りを捧げ、墓地開設を受け入れてくれたインドの人々、これを守り続けて来ていただいた歴代住職の方々、全ての人々に報恩感謝の意を示す機会でもあります。

ここに暮らす皆様は、是非、この小冊子をご一読いただき、一度は日本人墓地を訪れ、ムンバイ日本人墓地の歴史を通じ、この一世紀にわたるムンバイと日本人の縁をご理解いただければと祈念致します。

编者注Ⅱボンベイの公式呼称は、一九九五年（平成七年）に現地語（マラティ語）のムンバイに変更されましたが、旧呼称も慣習的に使用されており、本冊子では「ボンベイ」「ムンバイ」の区別は筆者の表記に従いました。

目次

口絵 1～8

はしがき 今井正浩・ムンバイ日本人会会長 9

日本人墓地100周年に寄せて(寄稿)

持田多聞・ムンバイ日本人会名誉会長(在ムンバイ日本国総領事) 13

城なご 芳久・前ムンバイ日本人会会長 16

ルポ ムンバイの日本人先達の足跡をたどる

永田和男・読売新聞ニューデリー支局長 20

日本人墓地100周年 読売新聞記事 47

日本人墓地100周年に寄せて(寄稿)

萩生田浩次・前在ムンバイ日本国総領事 49

森田捷泉・日本山妙法寺孟買道場主任 55

インド・ムンバイリポート 熊本日日新聞 59

日本人墓地100周年に寄せて(寄稿)

服部洋子・ムンバイ日本人会桜会会長 60

大久保美喜子さん(作家) 64

ウシヤ・タツカール ガンジー記念博物館名誉館長 68

年表 70

あとがき ムンバイ日本人会国際部 75



ムンバイ日本人墓地100周年に寄せて

日印の礎を築いた方々に思いを致す



ムンバイ日本人会名誉会長（在ムンバイ日本国総領事）

持田 多聞

今般、当地日本人会が中心となり、関係者のご協力を得て、当地に日本人墓地が開設されてから百周年になるのを記念して本誌が上梓されることとなりました。

日印関係は、遠く奈良時代にまで遡り、滔々とうとうと流れるガンジスのように、今日まで、文字通り「まさかの時の友こそ真の友」という諺ことわざの如く、尊敬し合い、助け合う長きにわたる歴史に彩られています。

本誌を読んでいただくと、日本とムンバイとの関わりが百年以上前に遡ることが分かります。そのような昔にも、当時の商社員が日本近代化の牽引力となった紡績業の原料の棉花を求めて、インド各地を飛び回っていた情熱と使命感には驚嘆せざるをえません。当時の日本人社会には、商機を求めて渡ってきた様々な職種を生業とする日本人も活躍しており、日本とムンバイとの間で経済活動を通じた交流が早くから発展していたことは、昭和初期に相当規模の日本人社会が形成されていたことから窺えます。

墓地の開設後百年、その間に我が国は世界第二の経済力、G8のメンバー、国連での活躍等々、政治的にも経済的にも世界に誇る豊かな国に発展しました。一方、インドも、一九九〇年代からの経済自由化により国内の産業は堰を切ったように成長著しく、IT産業も世界の中心地となるほどまでに発展し、アジアの大国としての力を着実につけています。

かかるインドの発展は、我が国にとってのインドの重要性に質的な変化をもたらし、二〇〇〇年八月の森総理の訪印で、「日印グローバル・パートナーシップ」の構築が合意され、両国の関係は、地球規模の平和と安定の担い手として人類社会に貢献していくことを目指したものとなりました。

その後、小泉総理の訪印（二〇〇〇五年四月）で右関係に戦略的方向性が与えられ、マンモハン・シン首相の訪日（二〇〇六年十二月）を経て、二〇〇七年八月の安倍総理の訪印で、政治・安全保障、経済や地域的課題、国際的課題までを両国の協力の課題とする「戦略的グローバル・パートナーシップ」へと更に高度な関係へと発展しました。二〇〇八年十月にはシン首相が訪日し、右「パートナーシップ」の更なる前進が確認されました。

近年の日印の経済関係は発展の一途にあり、貿易量の着実な増加と飛躍的な対印投資の増大に表れています。また、両国の経済規模からはその貿易額はまだまだ少なく、今後の更なる伸張が期待されます。また、現在、我が国の支援を得て進められているインド貨物専用鉄道計画やデリー・ムンバイ間産業大動脈構想の完成の暁には、それが日印両国にもたらす経済効果とその波及効果は計り知れないものがあり、日印関係に新たな一ページが書き加えられることになると思われます。

他方、その足跡はわずかに供養塔の碑銘に刻まれているのみですが、今日の緊密な日印関係を築く上でその礎となり、故国日本に思いを馳せながらこの地で亡くなった幾多の方々に思いを致さざるをえません。

改めて、この地に眠る方々のご冥福をお祈りすると共に、現在の日印関係が当時と比較すべくもなく大きく花開いているのを喜んでおられることを願うばかりです。

日本人として



前ムンバイ日本人会会長（前インド三菱商事ムンバイ支店長）

城 芳久

最初に日本人墓地を訪れた印象

生活感溢れるムンバイの居住区ウォルリーの一角に、対で聳える「供養塔」と「南無妙法蓮華経」の石塔が聖なる静謐さを保ち永眠する人々を供養している、というのが日本人墓地に最初に足を運んだ時の印象でした。決して大きな石塔ではないものの、凛として立つその姿に日本人の歴史を刻む重みを感じた記憶があります。

合掌した後に日本山妙法寺の森田捷泉住職に導かれ石塔横に回ると、この地に眠る人々の名と享年が墓誌に刻まれ、その中に若年の女性と幼年齢で永眠した名が連なるのを見るに、からゆきさん〴〵を思い起こし、百年の昔に日本から遠く離れた異国の地で命を落とされた方々を思うと胸が熱くなり、あらためて合掌しました。

歴史を振り返って

思えば十九世紀後半からボンベイは日本に先駆けて鉄道が走る、アジアでも有数の商業地、寄港地であったことからその繁栄を謳歌し、日本企業も海運・綿花産業を中心に多くの日本人を派遣し、昭和初期の最盛期には三千人もの賑わいを見せていたとのことでした。

一方、医療、衛生面を含めて当時の生活環境は非常に厳しく、無念にも異国の地で最期を迎えられた方々も少なくなかったと推察します。かかる中で当時の日本人会がボンベイ市から永代自由使用权を獲得して供養の地を得ることが出来たことは、日本人会の弛まぬ交渉とボンベイ市の温かい配慮の賜物と思います。

インドの懐の深さ

ヒンドゥー教が主流のインドですが、異教を迎え入れる心も持ち合わせており、

一九〇八年（明治四十一年）にボンベイの地に日本人墓地を、一九五六年（昭和三十一年）に墓地を管理する日本山妙法寺の建立を許可したインドの慈愛の精神を誠に有り難く思いますし、特に日本山妙法寺の建立では一般企業であるビルラ財閥が資金援助を行うなど人種、宗教を超えたインド人の豊かな人間性とその寛容な精神を感じます。

一九九三年（平成五年）にボンベイ市にまで広がった宗教騒乱の際に森田住職が一人、南無妙法蓮華経」と唱えて、混乱に気持ちが高ぶる人の波に入って安寧の心を訴えたことがありますが、人の本質に触れる心の響きは異教であれ排除せずということでしょうか、インド人の平和を尊ぶ心こそが日本人墓地の百年の歴史の守護神であったと言えます。

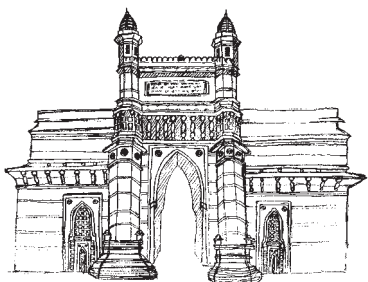
日本人としての使命

昨年二〇〇八年（平成二十年）十一月にムンバイ市内でテロが発生し、日本人を含む多くの方が犠牲となりました。亡くなった方のご冥福を改めてお祈り致します。

今回のテロは宗教に起因した国際的な背景も否定できないのですが、ムンバイで生活する日本人として感じるに、インド人は平和と安寧を抛り所として命を尊ぶ生活倫理観を携えており、自ら争いを望むとは思えません。日本人墓地が百年の歴史を経て今も存在することがインド人の寛容の精神の顕れであり、平和を望むメッセージとも受け取れます。

す。

一世紀を超えてムンバイに日本人が居住し、多くの方々がここに眠る、現在に繋がるこの歴史には先人の礎があり日本人墓地がそれを教えてくれる、これこそ我々が後世に引き継ぐべきものです。年に一度の墓参会を継続して亡くなった方の供養を欠かさず、インド人の寛容の精神に感謝する気持ちを忘れず、先人の足跡を次の世代に受け継いで行くことが、ムンバイ日本人会として、また、日本人としての義務であり使命であると思います。



インド門